

第8回市史講座ミニレポート：平成28年11月19日（土）

「近世の海運と松江」 講師：中安恵一先生（島根県古代文化センター特任研究員）



今回の講座は、江戸期松江地域の海運についてお話しいただきました。

17世紀に日本海西廻り航路が整備され、北前船で北国の物資を上方へ運び、大坂が天下の台所といわれるようになりました。出雲地方では宇龍や美保関の港が他国船で賑わいました。その頃、松江の廻船はどのような活動をしていたのかについて、各地に遺る史料に基づいてご紹介いただきました。

北陸地方（越後・能登）への活動としては、能登の回船問屋の「諸国御客船帳」の記録があり、船主は松江の町方が多く、船頭は加賀浦等の浦方から雇い入れ、積荷は鉄・木綿・塩・石材等の雲州国産物を中心に取引がある事がわかります。

また、九州地方（備前伊万里）への例としては、伊万里陶商の「大福帳」に雲州商人との取引記録があり、日本海域陶磁器の流通の担い手であった事がわかります。伊万里には「戸渡嶋社祭祀行事略記」に雲州商人が大獅子を寄進した記録が遺されていると話されました。

次に、小型廻船の活動として、島根半島の浦々から、2人～4人乗り（38石～150石積）の船で尾道、若狭、大坂、長州等へ出かけたことや、隠岐へ2人乗り（75石積）で四季を通じて出かけ、木材・海産物・牛馬等を輸送していることを「池尻家文書」等により話されました。

遠国への航行では船が難破することもあり、香川県の「三宅家文書」には500件以上の事例が収録され、出雲の森山屋吉郎右衛門の船が出雲鉄を大坂へ移送中、瀬戸内海で難船した例等が記載されていることを話されました。

そして、廻船業で成功した例として、加賀浦の福田屋定五郎について話されました。彼が著した「八十才一通印置事」には自らの経営規模の拡大や田地の集積等の回顧と教訓を記しており、小さな船での豆腐や酒・醤油・大豆等の商いから、船を大きくして（30 石）薪の輸送、さらに積量を拡大し（70 石）、大坂や瀬戸内へ干鰯商売へと拡大していき、堅調な経営で発展し、室座・船問屋株の購入や庄屋役を勤め、78 才で御米日帳宿役を勤めたとお話しされました。

最後に、松江地域の廻船経営は規模や経営手法等、様々であり、大規模・小規模それぞれについて、今後さらに研究が必要であると話されました。